HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	少数言語をアーカイブする : 津曲敏郎先生（文学研究科 北方文化論講座）
Citation	北海道大学附属図書館 本館 正面玄関ホール（展示）. 2014年10月20日（月）～11月3日（月・祝） Hokkaido University Library (exhibition). Monday, October 20th, 2014 - Monday, November 3rd, 2014.
Issue Date	2014-10-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57912
Type	lecture
File Information	OpenAccessWeek2014_03.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

少数言語をアーカイブする

津曲敏郎先生（文学研究科　北方文化論講座）

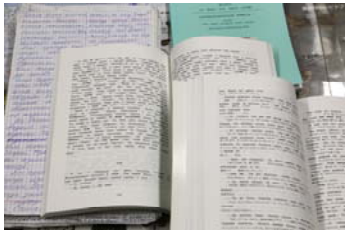

写真
左：アレクサンドル・カンチュガ氏による自伝のテキスト。原稿の左側にウデヘ語、右側にロシア語で記されている。「この対訳テキストは、現代のロゼッタ・ストーンと言えます」と、津曲先生。

中央：津曲先生が校正・編集・翻訳して、報告書の形にしていく。

人間の経済活動が多くの野生動物を絶滅へと追いやるように、近代国家への帰属やグローバル化により、少数言語は急速に失われようとしています。そのような言語の記録とアーカイブ化に取り組んでいる津曲先生にお話を伺いました。

❖

世界にはどれくらいの言語があるか知っていますか？実は、六千から七千の言語があると言われています。でも、そのうちの約半数が、話者数一万人に満たない少数言語です。話者数が百万人を超える言語は240程度、言語全体の４％にすぎません。しかもこのわずか４％の言語で世界人口の実に96％の人々が生活しています。つまり一握りの大言語で世界は動いており、少数言語は数は多くても顧みられることが少ないと言えます。これら少数言語のほとんどは、もはや子どもたちに継承されておらず、今後百年で母語話者がいなくなると考えられています。

研究ではこのような少数言語の記録を課題としています。その意義としては三つのことがあります。

1. それぞれの言語には民族の何千年もの生活の知恵と文化が込められており、どの一つを失うことも人類文化の損失である。
2. 言語学的な立場からは、人間の言語全体を理解するうえで、少数言語は貴重なデータを提供する。
3. 当該民族の人々にとって、言語の記録はアイデンティティの証として、また祖先の言語を学ぶ教材として不可欠である。

研究の方法

少数言語は、多くの場合文字を持たないため、話者の発音を聞き取るところから始めます。その際、語彙・文法・テキストは、言語記述の３点セットと言われます。始めに、基礎語彙と呼ばれる単語を採集し、徐々に文の形に拡大していくことによって、文法調査に進みます。一方でテキストと総称される、その言語による伝承、民話や日常会話などを記録します。こうして書き取られた記録は、言語学のデータとしてだけでなく、民族の歴史や文化の研究にとっても重要です。

ウデヘ語を記録する

ウデヘ民族は、ロシアの沿海地方、ハバロフスク地方に住む、1500人ほどの民族です。現在、ウデヘ語を母語として話す話者の数は100人以下で、それ以外はロシア語を母語としています。母語話者の数は減ってきているものの、言語を含めたウデヘの文化を伝承していきたいという動きがあります。通常の学校教育はロシア語ですが、現地語教育も限られた範囲で実施されています。また、ウデヘの人々は、多くの場合、外の世界が自民族の文化に関心を持つことを歓迎していて、言語研究にも協力的です。

アレクサンドル・カンチュガさんは、ウデヘ語の話者で、また小学校の国語（ロシア語）の先生を務めていました。この方に、自伝やウデヘの伝承物語をウデヘ語とロシア語の対訳形式で書いてもらっています。このテキストを整理して研究資料『ツングース言語文化論集』というシリーズとして印刷刊行しています。印刷物の形だけでは配布先が限られていましたが、**HUSCAP**で公開することで、より多くの人にこの資料を届けることができるようになりました。

HUSCAPによるアーカイブ化と現地還元

HUSCAPに研究成果を公表することで、研究者に開かれた形で研究資料を活用してもらうことができると思います。音声資料（MP3ファイル）を公表できる意義も大きいです（海外からのダウンロード数も多いようで、嬉しいです）。書き取ったものには、研究者の解釈や、ときには誤りが入ることもありますから、言語研究にとって、音声を合わせて記録することは重要です。逆に録音だけが残っても、原文対訳テキストとセットになっていないと、話者がいなくなってからでは解読するのがきわめて困難です。

HUSCAPによるアーカイブは、言語学者だけでなく、少数言語をもつ民族にとっても、言語の活性化につながるのではないかと考えています。少数言語は、今後母語話者が増えていくことは期待できず、ネイティブな言語として復活することは難しいでしょう。ウデヘの子どもたちが将来、アーカイブを通して、自分たちの民族の文化についての知識・関心をもち、ウデヘ語がアイデンティティのよりどころとしての役割を担っていくことを期待しています。

言語研究は人と関わる研究です。現地の方々から受け取ったデータを返すこと、研究の結果として何を現地に還元することができるかを考えています。現在、ウデヘの村ではまだ誰でもインターネットを利用できる状況にはありませんが、今後は学校での現地語教育などの場で活用されることも考えられます。**HUSCAP**で今、記録しておくことは、いつか使われる時に備えてデータを蓄積していくことだと考えています。

HUSCAPで、上記ウデヘ語資料を含む少数言語アーカイブをご覧いただけます。ツングース言語文化論集：
http://hdl.handle.net/2115/56190